

最小の費用で最大の効果がある合理的な治水計画の策定を求める

- ① 河川整備の予算は限られているから、最小の費用で最大の効果がある治水計画、流域住民を洪水氾濫の危険から確実に守ることができる合理的な治水計画が策定されなければならない。これが治水計画の基本原則である。
- ② 今回の利根川河川整備計画の目標は本川 1/50、支川 1/30 となっているが、利根川の河道の整備状況はきわめて遅れており、現況河道で対応できる洪水の確率規模は、国交省の回答によれば、未だに利根川 1/15、渡良瀬川 1/10、思川 1/20、巴波川 1/5 にとどまっている。
- ③ 利根川の河道整備が遅れてきた理由は、旧河川法時代の治水計画、工事实施基本計画にある。この治水計画では治水目標が 1/200 に設定されていたため、1/200 の段階で必要となる事業に巨額の費用が投じられ、1/5～1/20 レベルの現況が残されることになった。
- ④ このような利根川治水計画の整合性のなさを示す端的な例が渡良瀬遊水池の大規模掘削計画である。渡良瀬遊水池は本州最大のヨシ原が広がる湿地帯で、数多くの希少動植物が生息・生育する自然の宝庫である。この遊水池の一部を大規模に掘削して 500 万 m^3 以上の治水容量を確保する事業が計画されようとしている。この大規模掘削が実施されれば、遊水池の素晴らしい自然が大きく損なわれることは必至である。
- ⑤ しかし、渡良瀬遊水池は洪水調節化の工事が完了していて、現状で 17,180 万 m^3 の治水容量がすでに確保されているから、あと 500 万 m^3 以上の治水容量が必要となるのはよほどの大洪水の時だけである。国交省の計算でもそれが必要となるのは 1/200 以上の大きな洪水が来た時だけである。実際に最近 50 年間で最大級の洪水である平成 10 年 7 月洪水でも、渡良瀬遊水池では治水容量の 6 割以上が空いていたから、通常の洪水では十分な余裕がある。
- ⑥ 一方、利根川とその支川の現況河道は上述のとおり、1/5～1/20 のレベルにあるから、その現況を踏まえれば、遊水池の大規模掘削事業を進める緊急性は皆無である。この大規模掘削を行ってもその治水容量増加分が必要な事態に至るよりはるか前に周辺の河川は氾濫してしまう。今実施すべきことは周辺河川の堤防嵩上げ・補強や河床掘削といった河道整備を進めることであって、緊急性がなく、巨額の事業費を要する遊水池の大規模掘削に河川予算を投じるべきではない。
- ⑦ 治水計画の基本原則「最小の費用で最大の効果がある治水対策を進める」には、ダム建設も抵触する。ダムが治水対策として機能するのは、あくまでダムの集水域に大量の雨が降って氾濫から守るべき下流部の洪水流量の低減に大きな寄与をする場合だけである。
- ⑧ 吾妻川に計画中の八ッ場ダムの治水効果については国交省が過去の 31 洪水（1937～74 年）の引き伸ばし計算（200 年に 1 回の雨量を当てはめる計算）を行っている。計算結果のうち、河川砂防技術基準（解説）に適合する 12 洪水（引き伸ばし率 2 倍以下）を取り出すと、その 12 洪水の中で計算上、八ッ場ダムが治水面で意味をもつのは 1 洪水に過ぎない。これは、吾妻川上流部の人々が群馬の天気図ではなく、長野の天気図を見てその日の行動をきめるとされているように、吾妻川上流と利根川本流筋とは雨の降り方が異なっていることに起因している。すなわち、利根川本流筋に大雨が降った時は吾妻川上流にはさほどの雨が降らず、逆に吾妻川上流部に大雨が降った時は利根川本流筋では大雨が降らないことが多いのである。
- ⑨ 利根川の過去最大の洪水は昭和 22 年のカスリーン台風で、この洪水が 1/200 の洪水とされ、その再来に備えるために利根川治水計画がつけられてきた。このカスリーン台風が再来した場合について国交省が計算した結果をみると、利根川の基準点「八斗島」に対する八ッ場ダムの治水効果は何とゼロである。この洪水では吾妻川上流の雨量が小さく、降雨の時間帯がずれていたからである。これはカスリーン台風だけの特異現象ではなく、上述のとおり、他の洪水でもよく見られる現象なのであって、そのように治水効果が希薄な八ッ場ダムの建設に、巨額の河川予算を投じるべきではない。
- ⑩ 治水対策は限られた河川予算の中で最大の治水効果があるもの、確実に氾濫の防止に寄与するものを選択しなければならない。巨額の費用を要する、不要不急の遊水池大規模掘削事業やダム建設事業ではなく、治水効果が確実な河道整備、すなわち、堤防の嵩上げ・補強と河床の掘削をすみやかに推進する河川整備計画を策定すべきである。